

学校教育目標		ふるさと十津川を愛し、ふるさとでの学びを活かして、新しい時代を築く、心豊かな生徒の育成						総合評価 (A~D)	B
目指す生徒像		自主一自ら進んで学び、考えて行動できる生徒(確かな学力) 協働一勤労と責任を重んじ、礼儀正しく協力できる生徒(豊かな人間性) 剛健一自他の生命を尊重し、明るく元気でたくましく心身を鍛える生徒(健やかな体)							
令和4年度の成果と課題		本年度の重点目標			具体的方策				
適切な感染症対策を心掛け、生徒の安心・安全な行事運営に努めた。又、タブレット端末の有効活用、生徒会活動の活性化等に注力し、学校教育を充実させた。キャリア教育を学習意欲の向上に繋げるとともに、特別支援・通級指導の全校体制化をより一層推進する。		・基礎、基本の定着と、学びに向かう力を育成する。			生徒の実態を把握し、個に応じた指導の充実を図る。				
		・生徒の、主体的な活動を重視し、積極的に行動できる生徒を育成する。			生徒会活動が、より自発的・自治的な活動になるよう、全教員で支援する。				
		・郷土を愛し、未来を担う生徒を育成する。			地域の教育資源を活かした学習を通じ、地域課題を我が事として捉える力を育てる。				
		・自己の将来に対する目的意識を育成する。			勤労の尊さを理解させるとともに、自らの力で進路を選択していく生徒を育成する。				
		・心のふれあいを大切に、人権意識の向上を目指す。			道徳の時間を中心として、全教育活動を通して人権意識を高め、人権を尊重する実践力をもたせる。				
		・生徒が、心身ともに健康な学校生活を送れるようにする。			食に関する教育の充実を図るとともに、生徒が「健康」について意識を高めることをめざす。				
		・保護者や地域、村内各校所、関係諸機関との連携をより深める。			家庭や地域社会との関わりを多くもち、教育活動に必要な人材や資源を外部から集め活用する。				
評価項目	具体的目標 評価小項目	具体的方策	評価指標	中間期(9月)		年度末(2月)			
				自己評価 (A~D)	進捗状況	自己評価結果 (A~D)	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
学習指導	国語	小テストを実施し、こまめに復習する機会を設ける。	学習を習慣化し、日々の学習を積み重ねていく態度を養う。	B	週初めの授業で漢字テストを実施し、少ない範囲を小まめに学習できるように取り組んでいる。また、夏休み後には、課題テストを行いこれまでの学習を振り返る機会を設けた。	B	文法、漢字等の小テストを複数回実施し、ワークやドリルをテスト前にためこみだけ進めることができた。定期テストに向けて計画的に学習を進め小まめに振り返りをすることができ、誰がどのくらいのペースで学習を進めているのか把握することができた。	提出物が出ない生徒に対して個別の声かけを行う。また、懇談等で学習の様子を保護者と共有し、学校・家庭が協力して見守っていく。	・小テスト、ワーク、ドリル等を繰り返し実施し、個別に学習成果や定着度を把握することは大切である。
	社会	地図・地名・年表等の基礎的な内容を小テスト等を通じて定着させる。	基礎的な知識の理解と応用を通じて、学習に対する意欲を育てる。	B	基礎的な知識の定着に個人差がある。小テストを実施するだけでなく、再テストなど復習の機会を、他教科と時間を兼ね合いながら実施できるようにしていく。	B	学級担任や他教科と連携することによって課題ワークの提出率が改善、単元ごと小テストと併用することによって反復学習を進められたが、結果としては成績への反映は小規模。	課題提出を習慣化するため、生徒への働きかけを、よりこまめに行っていく。さらに自主的に取り組めるようにすることによって、結果へつなげられるようにする。	・社会科は基礎的な用語が多い。記憶からの理解定着を図っていることが分かる。
	数学	自分の考えを説明する活動を通じて、数学の説明することに対する苦手意識を少しでも軽減させる。	生徒一人一人に応じて説明しやすい方法を考え、自らの考えを説明し調整できる授業を研究・推進する。	B	タブレットを用いた授業ごとの確認シートで授業内の理解度を可視化することで状況把握を行っている。さらなる理解を深めるため説明する問題を取り入れる。	B	各学年の生徒の様子などから、説明をする場面については適宜変更している。生徒一人一人が説明しやすい方法や環境を作るように選択肢を与えながら行うことができた。また、記述形式の問題に対する苦手意識の克服、文章に表現する力が不足している。	記述形式の問題について、説明しやすい問題や説明してみたいと思える問題から取り組むことや、記述の仕方など丁寧に指導にあたっていく。	・説明と演習で、各生徒の理解度や進捗状況に応じた指導が見られる。
	理科	ワークと理科ノートを活用することで、重要語句の定着を図る。授業の中で、理科に関する日常の不思議、規則性を考えることで、思考力を高める。	自然の事象や現象について、理科の知識を活用して文章で論理的に説明する。	B	授業中に理科ノート、次の時間の最初にワークを実施することで、重要語句の定着を図ることができた。身近な自然現象に関係した文章テストを実施することで、重要語句の活用に取り組んでいる。	B	問題集や理科ノートでの用語確認、スタディサプリの学習テストを活用して、重要語句の定着を図ることができた。各章の学習前や学習後にロイロノートやClassroomを活用して、文章表現の問題を出題することで、自然現象を理科の語句を使って論理的に説明する機会を確保した。	ICTを活用した重要語句の復習だけでなく、読解力向上の観点から、読む、書く、聞く、説明するを意識した指導を計画する。	・学習前後のロイロノート(学習支援・プログラム・システムアプリ)等の活用による、自然現象の論理的な説明は教科の特質上重要である。
	音楽	積極的かつ楽しんで音楽活動に取り組む、音楽文化に親しむ態度を養う。	ICT機器の活用、綿密な授業計画、効果的な実技指導の研究、鑑賞における教材研究に努める。	B	1学期末に実施した音楽の授業アンケートでは、各学年を通じて進んで音楽の授業を受けている様子が見られた。特に歌唱と器楽の授業に関しては高い満足度が見られた。鑑賞の授業においても積極的に授業に参加できる工夫を図ってきたい。	A	合唱祭において、全校合唱を実施し、各生徒が音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組むことができた。また、鑑賞領域においては研究授業を実施し、十津川の音頭りに用いられる音楽の特徴とその背景となる文化と歴史との関わりを理解することができた。	今年度は表現領域において歌唱、鑑賞領域の指導の充実を図ることができた。新たに器楽の指導力を向上させるにあたり、従来のリコーダーの指導に留まらず、ギターや箏の指導についても研究を重ねていく。	・郷土の音楽に親しむ指導や楽器にギター演奏を取り入れることは新しい観点である。
	美術	できる限り多くの作品例や視覚的資料を提示し、それらから感じ取れる美や創意工夫を自分の表現に活用する。	各自が造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができる。	B	どの学年も各課題において実際に実習に取り組む前に自分の作品制作について十分検討できるようにしている。	B	課題制作前にWeb等を活用して十分に表現方法や工夫するところを自分自身の力で検討することによってより深いある表現が出来るようにできた。	制作前の検討する時間を取り過ぎてしまう生徒があり、実際の制作時間が足りなくなる場合があり、スケジュールマネジメントも各自行うことができるようにする。	・日本のレオナルド・ダ・ビンチと云われる本阿弥光悦の作品等も紹介し、西洋美術に伍した日本美術のすばさを知らせていきたい。
	技術	基本的な技術の知識を学習した上で、その知識を活用することのできる実習を提供して知識の定着と達成感を味わい意欲を高める。	人間の営みの中で発展してきた技術について理解し、自分自身の生活をより良くしようとする態度を身につける。	B	各学年、技術についての知識を学習した後、実習を行い内容を深めることができていた。	B	日常生活に活用できる実習内容や生徒の興味関心が強い内容を選択することができた。	今後とも、日常生活との関わりやテクノロジーの発達、生徒の興味関心等を取り入れた授業内容を吟味していく。	・大人になってDIYでの物作りが増えている。その楽しさの基礎実習をお願いしたい。
	家庭	各分野において可能な限りの実習を実施し、技能を定着させる。	衣生活・住生活・食生活を自身の問題として考え、家庭で実践する態度を養う。	B	衣生活、食生活ともに1度は実習することができた。家族・家庭生活分野においても、11月に保育実習を消費生活は消費生活センターへ問い合わせるオンライン授業を3学期に予定している。	B	家族・家庭生活分野では、保育実習を実施し、幼児の発達生活、幼児の遊びの意義について基礎的な理解を図ることができた。衣食住の生活では、食事の役割、衣服と社会生活との関わりを理解し、家族・家庭や地域における生活の中から課題をもって考えることができた。	授業についてのさまざまな学びを家族・家庭生活や地域における生活の中から課題をもって考えることができた。解決する力まで伸ばすことができなかった。今後たくさんの実践や体験活動を通して課題を解決する力を伸ばしていきたい。	・保育実習で乳幼児の様子や保育所内での工夫を見たことは重要。育児は男女共通の課題であり義務である。
	保健体育	サーキットトレーニングを実施し、体力の向上を図る。生徒の運動能力に応じた試行錯誤の場を設定し、運動の技能や課題解決のための思考力を高める。	自分自身の能力に応じた運動への取り組み方を身につけ、基礎的な技能を身につけている。	B	毎時間のサーキットトレーニングにより、継続的に体力の向上に取り組んでいる。学習カードによる振り返りを活用し、自分の課題や達成度に応じた取り組みができるような、場や課題の設定を行っている。	B	新体力テストやマラソン大会の結果から、昨年度よりも学校全体として生徒の体力が向上傾向にある。サーキットトレーニング等の基礎的な運動の継続と、個々の生徒の段階に応じた課題の設定が成果に結びついている。	授業での取組をもとに、自分の体力に合わせた運動計画の作成や、学級の実態に合ったウォーミングアップの選択など、生徒が主体的に考えて実践できる機会を増やしていきたい。	・サーキットトレーニングが前年度比で体力向上につながっているなら、更なる継続と工夫を期待する。
	英語	できる限りわかりやすい授業展開を心がけ、生徒の苦手意識を軽減させる。	間違ふことを恐れず、積極的に英語を使う態度を養う。	B	プリント教材の作成を工夫している。主に英語を「書く」という点に重点を置き、積極的に英語を使う機会を増やすことができていた。	B	プリント教材では、ALTと連携し、ネイティブの発音を聞き、聞き取った内容を書き取るという工夫をすることで、英語を書く機会を増やすことができた。しかし、授業以外で英語を話している生徒が少なく感じている。	ALTと連携し、休み時間や昼食時など、生徒とALTが話すことのできる機会を設けるために、会話をできるような教材を作成し、実施することを試みる。	・英会話の習得は理想であるが、容易ではない。「書く」という作業を重点課題としたことは評価できる。

研究研修	生徒の主体的な学びを育てる授業の創造	総合的な学習の時間を通して、十津川村の自然、歴史、文化を主体的に学ぶ。ふるさとの学びを基盤に、村内・村外で新しい取組を実践する。	生徒が主体的に、計画、活動、振り返り、改善を図り、新しい取組を生み出すことができています。	B	1年生の総合的な学習では、十津川村の文化を中心に学習している。地域の方と協働して生徒の教育に関わることで、村の文化を大切に育むことができています。	総合的な学習の時間を通して、PDCAサイクルの学習を実施した。行事の内容を生徒に委ね、考えさせることで、生徒自身が自分の学習を主体的に振り返り、改善する機会となった。また、ふるさとの文化や歴史を大切に育むことができた。また、自己認識を育むことができた。	学習指導要領に定められた目標を踏まえて、3年間を見通した総合的な学習の年間計画を作成することで、学校のカリキュラムマネジメントを充実させる。	・ふるさとの文化や歴史を体験させて、ふるさと愛や誇りを抱かせる指導は評価できる。地域を良くしようとする姿勢が見られる。
生徒指導	積極的な生徒指導の推進	安全で安心できる学校を目指し、登下校の立哨や指導、こころといじめのアンケートを実施する。	いじめアンケートをもとに、早期発見、未然防止に努める。定期的に生徒指導部会を設け、職員全員で情報共有し指導にあたる。	B	アンケートの実施後は各担任が二者懇談を行い、1人1人と話す機会を設けた。気になる生徒については、SCとのスクリーニング会議や生徒指導部会を実施し、職員全員で情報共有を行った。	アンケートの実施や二者懇談、教員同士の情報共有を行い、生徒指導上の問題を未然防止、早期発見・早期対応するための取組を行うことができた。SCやSSW連携を強化し、外部機関や、学校全体で生徒と関わり様子を見守ることができた。	アンケートや二者懇談の実施は今後も継続し、SCやSSWとの連携を図りながら、全校員で生徒に関わり見守っていく必要がある。関係機関との連携を強化し、外部講師による講演や出前授業も積極的に取り入れていきたい。	・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携をとりながら学校全体で生徒を見守っていることがよくわかる。登校時に元氣よく挨拶できている。
特別活動等	望ましい集団活動を通じ、自己を生かす能力の育成	すべての生徒が主体的に学校生活を送るため、生徒会執行部を中心に新たな活動に取り組んでいく。	行事ごとに、生徒一人一人が目標を設定したり、各行事で生徒会執行部以外に実行委員を募集するなどして生徒全員での活動にしている。	B	年間行事に合わせた委員会の時間を確保することで、委員会を中心にした行事の運営を実施することができている。	年間を通して委員会の時間を確保することで、計画的な委員会活動を実施することができた。委員会活動を中心に学校行事を運営するようになった。また、自主的な活動にすることができた。また、学校生活をよりよくなるために、各委員会が常時活動を充実させることができた。	生徒会主体の行事運営を進めることで、生徒の主体性を引き出し、責任ある学校自治を進める。異年齢による集団活動の機会を増やすことで、よりよい人間関係の構築を目指す。	・委員会活動の充実が生徒の自主性や責任ある活動につながっていることは評価できる。
教育相談	自尊感情の(自己肯定感)の育成	生徒の自己否定的な意見や小さな変化を見逃さず、生徒の不安や悩みに寄り添い、聞く体制の充実を図る。	教員で連携し、未然防止、早期発見、早期対応、支援につなげる。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとも積極的に連携し、支援についての助言・指導を得る。	B	スクールカウンセラー来校日を事前に職員朝礼やお便りなどで教員・生徒・保護者へ知らせ、情報共有や相談の実施につなげていく。9月末時点でスクールカウンセラーとの相談は生徒3回、保護者2回であった。	いのちと生活のアンケート後にスクリーニング会議を実施し、生徒理解を深めることができた。SCの来校日に合わせて、生徒への授業や職員研修を前向きに実施することができた。また、SCが保護者とも話す機会を設けることができた。情報共有や相談を積極的に行うことができた。	カウンセリング体験で何を話せば良いかわからないという生徒がいたため、話したいことや自分が困っていることを明確にできるようにするために、事前にアンケートを実施する。年度の前半に生徒がSCと関わることでできる活動を実施し、SCとの関係づくりを促進する。	・「災害時の心のケア」を職員研修したことは、「能登半島地震」の例もあり評価できる。平時からの備えが、災害が起きた際の生徒へのケアに活かされている。悩みを聞く体制の充実の意識と生徒の感じ方は違う。
キャリア教育・進路指導	進路実現を見据えたキャリア教育の充実	生徒が主体的に進路選択できるように、さまざまな進路の情報や体験活動を提供する。	生徒が、自分なりの将来像を実現するために、学校生活や学習活動に前向きに取り組んでいる。	B	悪天候のため第1回の進路説明会を実施することができなかった。第2回の進路説明会を11月に予定している。進路通信、進路掲示板、パンフレットの置き場を3年生教室前に設け、手に取りやすい環境を整えている。	2年生では、職場体験学習を実施し勤務先があり、どのような選択があるのかを生徒がイメージできていないところがある。早い時期からいろいろな学校の体験に参加し、目標や夢をもつことができるよう環境を作っていく。	・職場体験の機会を与えてくれる事業所にまずは感謝する。生徒は地域でも見守り育てられる。	
道徳教育	道徳教育の充実	各学年の道徳や合同道徳で、考え議論する授業を行い、多面的・多角的に考える力を養う。	学年の枠を超え、自分の考えを出し、相手の意見も聞く姿勢をもって取り組んでいる。	B	昨年度に引き続き合同道徳を行い、学年を越えて互いの考えを交流している。複数の教員で相互の返しを工夫、わらわらに迫る授業を展開するように工夫している。	複数の教員が関わり、合同道徳を行うことができた。さらに学年道徳では、各学年、打合せの時間を確保しながら、毎月について話し合えること、生徒のねらいに迫る授業づくりを意識してきていた。2年間の研修の集大成となる研究大会が実施できた。	合同道徳では、異学年で一つの教材を扱ったため、しっかりとたねえりや意図を持って選択することが必要である。また、内容項目を確認し、学年道徳とのバランスを考え計画を立てる必要がある。	・2年間の研修の集大成となる研究大会が実施できたことに尽きる。できれば、「学校運営協議委員会」にも授業参観の機会を与えて頂きたい。
人権教育	生命の尊重と人権意識の高揚を目指した確かな人権教育の推進	人権講話や道徳を軸とし、日常生活の中で成功体験を積み重ねることで、自己肯定感を養う。	自らの成功体験ができるような活動や、日々の生活の中で適切な声かけや行動が見られた場合は積極的に褒める。	B	昨年度に引き続き人権講話を各先生方から行ってもらう。人権について深めたい。各委員会活動などで、それぞれの役割を担いながら成功体験を積み重ねている。	人権講話ではSDGsの観点から踏まえた内容を講話していただき、自己の振り返りの内容について、自分事として考えられるようになってきている。ただ、人権作文については内容が自分のこととして綴れていない生徒が見受けられる。	人権講話の回数を減らしているため、より自分事として考えられる内容であったり、発問をしていただくような共通認識をもって取り組み、人権講話の内容から考えたことを綴れるように指導していく。	・「持続可能な開発目標」は、世界的な潮流であり課題である。若い世代にはこれに敏感に反応して実践してほしい。講話は意義があったと思う。
特別支援教育	みんなで関わる特別支援教育の推進とインクルーシブ教育の充実	人権教育や道徳教育、各学習活動を通して特別支援教育について正しく理解できる学習を行う。専門機関などとの連携を図り、特性や障害に応じた指導計画の作成や適切な指導を行う。	生徒間や教師間でそれぞれ偏りのない特別支援教育についての知識を共有する。専門機関と密に連携を行う。	B	担当教員を中心に特別支援教育を進めるにあたってすべての教員が体制を共有し特別支援対象生徒にかかわる体制を整えている。	定期的特別支援委員会を開きその内容を職員会議等で共有することができ、全教員で特別支援教育に関わる体制がより強く整った。	今後、ますます増加することが予想される特別支援教育対象生徒を受け入れる体制づくりを強化する。	・特別支援生徒の生活態度や学習活動の成長は、担当教員のみならず、保護者や学校職員全体で意識疎通を図り、実践していると評価できる。
安全教育	保健安全・防災安全教育の充実	生徒が自己管理能力を身につけ、健康に生活ができるよう啓発・指導をする。また、日常の健康観察により、生徒の健康状態を把握し、健康の保持増進に努める。	教員で連携し、生徒の日常の様子を把握し、様子を見ることも適切に対応する。気になる様子の生徒がいた際には、教員で情報共有し、共通理解を図る。	B	健康観察による生徒の健康状態の把握や体調不良等の生徒に関する情報共有を実施している。また、歯科衛生士による歯みがき指導や栄養教諭による食に関する指導を実施した。	保健だよりの発行や中保健ニュースの掲示により、健康安全に関する啓発活動を実施することができた。歯科衛生士による歯科指導、栄養教諭による食に関する指導、学校薬剤師による薬物乱用防止教室を実施することができた。	今年度の取組を継続するとともに、歯科指導の対象を1学年から3学年へ拡大する。	・歯科指導、食指導、薬物乱用防止指導等、成長期で精神的にも肉体的にも不安定な要素を持つ生徒の健全育成に配慮している取組であり評価できる。
家庭・地域社会・他校種・関係機関等との連携	学校評価を活用した開かれた学校づくり	積極的な情報収集・発信・連携により、保護者・地域等から信頼される学校づくりを目指す。	総括に基づいたPDCAサイクルにより、連携を充実させる。	B	昨年度からの引継ぎが確実にできていない部分があり、保護者から指摘をいただいた。	総合学習等で地域との連携を有効活用した教育活動を展開できた。保護者アンケートには概ね良好な評価であったが、学校の取組を的確に伝えるよう工夫したい。	令和7年度にへき地教育研究大会を十津川村で開催する事も含めて、PTAの連携を強化し、効果的な行事や学校運営を展開したい。	・地域や保護者への理解と協力は欠かせぬことだけに、更なる工夫を期待する。
第1学年	基本的な学校のルールを守り、集団生活の基礎を身につけさせる。	友達との会話と先輩や先生との会話での言葉遣いに気を付けることや、チャイムと同時に授業と休み時間とのメリハリをつける。	授業と休み時間のメリハリをつけるよう声かけを徹底し、学年だけではなく他の先生とも連携し指導する。	B	言葉遣いについて、違和感を感じる言葉に関しては、声かけを行うことで、言葉遣いには少しずつ改善が見られる。時間についても予鈴で動くことができるようになってきている。	先生に対する言葉遣いや、先輩に対する言葉遣いに関しては概ねできるようになってきていると感じている。チャイムでの休み時間の切り替えもできるようになってきている。主体的に取り組む姿も見られるようになってきたが、まだまだ後ろ向きな部分がある。	自分たちが取り組んでみたい、自分たちの力でやり遂げたいなど、生徒一人ひとりが主体的に取り組む姿が見つけられるような声かけ、成功体験を積み重ねるような取り組みを行っていく。	・適切な言葉遣いができなければ、節度ある人間関係は構築できないので、引き続きよろしくお願ひしたい。
第2学年	リーダーシップの養成とキャリア教育の充実	学校生活の様々な場面で、集団の一員であり、中心であることを自覚させる。また、職業学習や進路学習を中心に、将来についての見通しを立てる力を養う。	上級生や下級生との関わりの中で他者を尊重する態度を養う。また、自分の理想とする将来を実現させるための見通しを立てようとしている。	B	職場体験を通して、自分の将来について考える機会を設けることができた。しかし、学校生活に慣れ、生活リズムの崩れや、家庭学習をおろそかにしているように感じる。学級通信などを活用し、保護者との情報共有を大切にしていきたい。	職場体験後は、自分の進路について考えている様子が見られたことができた。しかし、学級通信を保護者に渡すことをしていない生徒がいて、保護者に日頃の様子伝わっていないかった。	学級懇談会や、三者懇談会等で過去に配布した学級通信等を見ていただけのように置いておく。必要であれば、その機会に再度保護者に配布する。	・志望校の選定に向け、保護者にはより多くの資料提供を今後も期待したい。
第3学年	最高学年としての責任感の育成と進路学習の充実	最高学年としての自覚と責任を意識させ、主体的な活動を積極的に取り入れる。また、自己の能力や目標に応じた進路選択ができる力を養う。	集団の中で自分の役割を見つけ主体的に活動に取り組んでいる。また、希望する進路を実現させるために自主的に行動する力が身に付いている。	B	様々な行事でコロナ対策が緩和される中、最高学年としてリーダーシップを発揮する場面が多く見られた。しかし、学習習慣が定着している生徒が少なく、自律性をさらに育んでいくことが今後の課題である。	学級活動だけではなく、学校全体の活動においても生徒が主体となった組織作りと、取組を実施することができ、学習習慣が定着している生徒が少なく、自律性をさらに育んでいくことが今後の課題である。	卒業まで残りわずかであるが、それぞれの生徒が選んだ進路で、より良いスタートを切ることができるように、自らを見直しより良く生きようとする態度を養っていく。	・最高学年としてリーダーシップを発揮する場面が多く見られたという点で、安心して構築立ちは見守ってやりたい。
学校教育の維持・向上	働き方改革の推進	教育活動の効率化を工夫し、生徒の学力向上と、教職員の仕事と健康の調和を心掛けた働き方改革を進める。	時間外勤務時間を増加させることなく、総括表の各項目で結果の維持・向上が見られる。	B	超過勤務時間は1人当たり9月までの合計平均で22時間減少している。教育活動もコロナ規制前の状況に回復している。	総括表の各項目で平均以上の結果を維持しながら、超過勤務時間の1人当たり月平均は2時間減少している。	現状の教育活動を維持するためには、教員数の減少に対応して、さらなる教育活動の工夫をしなければならない。	・働き方改革と言われて数年経つ。教職員の疲労回復と平素の研鑽にはより良い教育の基となる、無理のない勤務で結果の伴う指導に期待する。